

筑波大学所蔵・慈雲自筆本
『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」
— 2010 年度附属図書館特別展示に際して —

秋 山 学

1. 慈雲研究の現状

江戸時代中・後期の高僧慈雲尊者欽光（1718—1804）は、わが国における梵字・悉曇学のアークイヴとも言える「梵学津梁」全一千巻を編纂するとともに、「正法律」による戒律復興運動、雲伝神道の創設など、幅広い活動を展開した。筆者は、筑波大学附属図書館に所蔵される旧東京教育大学・東京高等師範学校以来のコレクションを基に、悉曇梵学関係の展示開催を企画してその準備を進める中で、これまで著作として確認されていなかった慈雲の『法華陀羅尼略解』（1803）ほか2点、計3点の自筆本を発見した。10月開催予定の企画展は、7月末現在、この『法華陀羅尼略解』を軸に、「梵学津梁」を構成する諸書三十数点を公開する計画で進められている。8月初旬提出の本稿は、展示書目図録の作成と併せて準備されたものであり、一部において内容上重複するが、9月初旬入稿予定の図録原稿を前に、その初稿としての位置づけをも有する。本稿では特に、この『法華陀羅尼略解』の翻刻、および新たに入手された「梵学津梁」高貴寺所蔵分収録のDVD版（2008；以降これを「高貴寺DVD」と呼ぶ）に基づく「梵学津梁」再構成に向けての方法論などを中心に記述するものである（なお執筆の途上に起稿した拙稿「慈雲さんのこと～拙著『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』に寄せて～」（『創文』No. 534, 2010年9月号掲載予定）とも一部重複する）。

慈雲尊者欽光による最大の事績「梵学津梁」をめぐっては、2009年8月から9月にかけて、第14回国際サンスクリット学会の開催にあわせ、京都大学百周年時計台記念会館において企画展「慈雲 JIUN MAITRA-MEGHA」が催されている。この際には、高貴寺所蔵の遺芳を主に、画像3点、梵本・梵学関係資料として21点が展示された（関係資料を提供してくださった本学人文社会科学研究科小野基准教授に御礼申し上げる）。2003年が慈雲の200回遠忌に当たると

ころから、その頃には大阪ほか各地で、慈雲による書の展覧会を初めとするさまざまな企画が行われたが、慈雲に対する関心は一般的・学術的両面において持続されていると言えるだろう。

上述の資料によると、「梵学津梁 総目雑詮之一」との見出しの下に、「(本目録は)慈雲自身が作成したもので、各巻数の書名と巻数が示され、総点数は1千巻となる。高貴寺に現存する点数はおよそ500である。「梵学津梁」は慈雲在世中に完結したのではなく、慈雲没後にも彼の弟子たちが補完の努力を重ねた。それぞれの目録には出入があり、現時点では未詳であるが、最も新しい目録(1930)の序文においても〈高貴寺ニ現存セルモノハ約五百巻ニシテ散逸セルモノ亦多カルベシ〉と述べられている。各目録の比較検討による出入と散逸書の確認のために今後の調査が期待される」とされている。筆者のその後の調査により、この記述は、「高貴寺 DVD」が編集されるに当たり、その基本方針となった長栄寺第14代住職上月明厳諦了(1894—1959)による「高貴律寺所蔵・慈雲尊者遺芳総目録 地」(昭和5年)に基づいていることが判明した。

慈雲は、「梵学津梁」の主要部分を、41歳から54歳まで起居した大阪額田・長尾の滝上流の雙龍庵ですでにほぼ完成させていたとされる。もっともそれ以降にも、多数の弟子たちを擁してその補充・完成に努め、諸書のうちには慈雲自筆の原本のほか、弟子による写本も多く遺されている。このような「梵学津梁」は、その大部分が高貴寺所蔵と伝えられるものの、その実像に関しては長く知られることがなかった。だが200回遠忌を期に、種智院大学学長の頼富本宏師を主幹とし、現高貴寺住職前田弘隆和上の監修によってデジタル化が進められ、大阪大谷大学や大阪芸術大学の協力のもと、2008年11月、高貴寺所蔵分についてのDVD版が完成している(2010年に雑補収録版を増補)。これが「高貴寺 DVD」である。

このたび筑波大学所蔵書の中から新たに発見された『法華陀羅尼略解』は、『妙法蓮華經』では巻第8陀羅尼品第26に収められる5つの陀羅尼、すなわち①薬王菩薩 ②勇施菩薩 ③毘沙門天王 ④持国天 ⑤十羅刹女による呪、および普賢菩薩勸発品第28に収められる普賢菩薩による呪を釈したものである。梵字テキストは弘法大師請来本(『梵字妙法蓮華經儀軌』)に基づき、竺法護(239—316)による268年完成の『正法華經』に見られる漢訳が逐語的に付されている。そのような性格から言えば、この著作も「梵学津梁」のなかに追補されて不思議ではないと言えようが、DVD版を確認したところ、一致するものはなかった。ということは『法華陀羅尼略解』はいわゆる「孤本」であり、現在のところ筑

波大学所蔵の慈雲直筆本しか存在しない、ということになりそうである。

ところで、新しい「高貴寺 DVD」を見てすぐに気づくことがいくつかある。

- 1) 副本の類が総数勘定に含められている。
- 2) 『慈雲尊者全集』には、「梵学津梁総目録」その他の題目により、数種の目録が収録されていたが、これら旧来の「目録」類に当然のごとく拳がっていた諸書が脱落している（『韻鏡』、『南海寄帰内法伝解纜鈔』、『方服図儀』など）。
- 3) 旧来の目録では「梵学津梁」に入るかどうか不明であったものが、今回の高貴寺 DVD には「梵学津梁」のうちに含まれている。従来、『全集』の「梵学津梁目録」の類に拳がる諸書は、『南海寄帰内法伝解纜鈔』など一部の書を除き、『全集』には含まれないことから、逆に『全集』に収められた諸書は「梵学津梁」には含まれないという想定が成り立ちえていた。つまり、『慈雲尊者全集』に収録されなかったのは「梵学津梁」のみであり、『全集』に収録されたものは「梵学津梁」に含まれないものだという意識が共有されていた。たとえば『理趣経講義』などがこれに当たる。だがこのたびの DVD 版では、『理趣経講義』も末証第二に含まれている。
- 4) 分類が旧来のものと異なる著作がいくつか見られる。たとえば『悉曇藏』は別証ではなく、雑証に入っている。

このように、今回の「高貴寺 DVD」によって明らかにされたものは、従来『慈雲尊者全集』に載る「梵学津梁総目録」から推測しえていたものとは、少しく異なっていると言える。

それはともかくこの DVD 版は、期せずして、代々高喜寺に関わった人々——和上、尼僧その他——の筆跡をそのまま電子化した産物であり、高貴寺史をも形成する貴重な資料と言える。この DVD 版が、梵字を含めた日本古筆学の発展に今後大いに寄与することが望まれる。以下、そのサンプルを示すことにしよう（0 に始まる 4 ケタの数字は、高貴寺 DVD 版の資料番号を示す）。

まず主要な筆記者としては、義文尼（1739—1773）、慧日尼（1740—1806）、諦濡（1750—1830；慈雲示寂後、高貴寺僧坊寺務第 2 世）、法樹（1775—1854；1833 年より高貴寺僧坊寺務第 4 世）、伎人戒心（1839—1920；1874 年より高貴寺僧坊寺務第 9 世）、伎人慈城（1885—1942；戒心の甥、高貴寺僧坊寺務第 10 世）などの筆跡が収められている。まず「梵学津梁」の中核部「本証」の筆者を一手に引き受けたのが義文尼であり、正確無比で、梵字にも優れてい

る。慧日尼は、尼僧にしては非常に力強く、達筆である（0127など）。このほか尼僧としては宗悟尼も秀でていますが、これは本学所蔵分にもその筆跡が見られるので後述する。また長宝寺の宝珠大尼は達筆の方であり（0090）、後述する筑波大本『普賢行願讚的示』の筆記者の可能性がある。

一方諦濡和上は、やや右上がりの「悪筆」と言って差し支えないであろう（0098など）。法樹和上は、やや横広だが筆勢のある字で、達筆と言って差し支えない（0099など）。伎人戒心和上は、ときに「大澄戒心」の名で現れ、筆勢のこもった達筆の方である。おそらく本学資料と関係するので後述する。伎人慈城和上は、ときに「慈城香澄」あるいは「菊寿」の名で現れるが、比較的早世された生涯を映すかの如く、やや弱さを感じさせる筆致である。なおここに挙げた諸師の墨蹟は、DVD 本体のほか、松本俊彰師の新著『慈雲流 悉曇梵字入門（応用篇）』（高野山出版社、2009年）にも取り上げられている。

新版「高貴寺 DVD」は、先に長谷宝秀（1869-1948）師が編纂した『慈雲尊者全集』からの経緯がある。晩年の伎人戒心和上は、『弘法大師全集』などですでに令名の高い宝秀師のもとに慈城師を遣わし、まずは慈雲の『方服図儀』の出版を慫慂、その後戒心師は示寂するが、慈城師が引き続き宝秀師の許を訪ね、戒心師の本懐が『慈雲尊者全集』の出版であったことを明らかにして、宝秀師にその編纂を慫慂したという。もっとも宝秀師が『全集』を編纂した際（1926）には、あまりの大部さのために「梵学津梁」を含めることは断念せざるを得なかった。このため「梵学津梁」は「幻の大著一千巻」と言われて久しかったが、このたび200回遠忌を期にデジタル化が完了したというわけである。

ところで、後述するように、筑波大所蔵『法華陀羅尼略解』には一箇所だけ、慈雲以外の筆跡による朱字での書き入れがある（五字分）。この『略解』が筑波大学の所蔵書に入った背景には、おそらく慈雲が晩年、京の阿弥陀寺に晋住してこの『法華陀羅尼略解』を成稿し、その後阿弥陀寺が廃寺となって書籍が売却された、という事情を想定することができそうである。慈雲は晩年、自らは經典儀軌について口述講義し、弟子が筆受する、というスタイルをとることが多かった。このスタイルであれば、ある著述に関して、著者以外にその存在を証言する他者が必ず実在することになる。今回『法華陀羅尼略解』について、その写本はおろか、その存在に言及した文献すら皆無であるところを見れば、おそらく慈雲は阿弥陀寺において、専ら自らの観想のためにこの小著述をしたためたと想定されよう。

このような慈雲晩年の、おそらくは京の阿弥陀寺に保管された『略解』に対

して、書き込みをなしうる人物としては、その条件が限られてくる。筆跡による推測からまず戒心師だと思われるが、戒心和上は1858年大阪北野万善寺寂然和上に師事、1863年喜連村如願寺に住持、梵明と海如（1803—1873；高貴寺僧坊寺務第7世）に学ぶ。1866年釈雲照（1827—1909）和上に従い陀羅尼を研究したのち、1874年高貴寺に晋住している。関西地方では、明治6年～10年（1893—1897）ごろ、特に廃仏毀釈の波が押し寄せた。戒心師は、上述のように1866年～1874年の間、雲照師のもと京に陀羅尼の遊学中であったため、戒心師は阿弥陀寺の廃寺前に所蔵書籍を参観することができたはずである。慈雲最晩年の京での著述であるだけに、おそらくこの著作の存在を知るのは、後にここを訪れた戒心師のみだったかも知れない。戒心師が高貴寺に上った前後に阿弥陀寺が廃寺となり、すでに長谷宝秀師が『全集』編纂を企てたころには、和田智満（1835—1909）師が1854年より晋住し、『全集』編纂時には多数の写本を供出した西賀茂神光院の蔵書には手が及んでも、すでに売却されたであろう阿弥陀寺蔵書のその後までは探索が及ばなかったものと考えられる。『法華陀羅尼略解』のわずかな書き入れに関しては、「見」の字（ツクリの場合も含む）の特徴的な筆致、筆勢などから、おそらく伎人和上の手になる可能性が高い。

では以下、慈雲の年譜、展示書目の解題、『法華陀羅尼』翻刻、『法華陀羅尼』解題、「梵学津梁」の再構築に向けての順に記述を進めることにしよう。

2. 慈雲の年譜

本章は、展示企画においては、導入部・年譜パネルを構成する。

- 1718（1歳）大阪中之島、高松藩蔵屋敷（大阪市北区玉江町1丁目）川北又助宅に上月安範の子として生まれる。
- 1730（13歳）父を失う。住吉郡田辺法楽寺に入り、忍綱貞紀に師事。
- 1733（16歳）京に上り、伊藤東涯に従って儒典詩文を学ぶ。
- 1736（19歳）『四分律』500結集の文を読んで菩提心を起こし、禪を修する。冬、野中寺にて秀岩に従い沙弥戒を受ける。
- 1737（20歳）3月、野中寺にて秀岩に従い秘密灌頂を受ける。
- 1738（21歳）貞紀に従って西大寺流の深奥を受け、四律五論および南山の疏鈔（「律三大部」）を研究する。11月、得度（野中寺にて自誓受による具足戒を授かる）。
- 1739（22歳）年初、忍綱（1671—1750）の後を襲い、法楽寺住職となる。3月、忍綱より西大寺流伝法灌頂、両部神道を伝授される。法弟の松林、具足戒を受ける。
- 1741（24歳）松林に法楽寺を譲り、信州正安寺の曹洞宗大梅禪師の下に参禅。

- 1744 (27歳) 4月、忍綱より長栄寺を託され晋住。この頃より、釈尊在世中の規律に従うことを目指す「正法律」運動を展開。
- 1745 (28歳) 4月、寂門に沙弥戒、愚黙に菩薩戒を授ける。10月長栄寺を結界、僧坊とし、沙弥の即成をあわせて4僧侶が揃う。
- 1746 (29歳) 7月 愚黙に具足戒を授ける。
- 1747 (30歳) 有馬桂林寺（現正福寺）を兼任。即成は野中寺で、
- 1748 (31歳) 寂門は長栄寺で具足戒を受ける。
- 1749 (32歳) 『根本僧制』5条を草す。
- 1750 (33歳) 4月、道宣（596—667）の著書『四部律行事鈔』を講ず。
- 1751 (34歳) 愚黙、即成あいついで死去。
- 1752 (35歳) 『方服図儀』を著わす。
- 1753 (36歳) 『枝末規繩』を著わす。
- 1754 (37歳) 『四分律』を講ず。
- 1756 (39歳) 春、法隆寺で聖徳太子の袈裟を検証。
- 1758 (41歳) 高野山の真源より「普賢行願讃」の梵本を贈られる。5月～7月の間『南海寄帰内法伝解纜鈔』7巻を額田不動寺にて完成、生駒山中腹に雙龍庵を結ぶ。
- 1760 (43歳) 『方服図儀講解』を著わす。
- 1761 (44歳) 雙龍庵時代法語1～9。
- 1762 (45歳) 雙龍庵時代法語10～39。
- 1763 (46歳) 雙龍庵時代法語40～50。『綱要』を草す。
- 1764 (47歳) 『根本僧制』の第4条について草す。
- 1765 (48歳) 『七九略抄』5巻、『七九又略』1巻、『七九国字抄』10巻を著わす。
- 1766 (49歳) 雙龍庵時代法語52, 53において「今後は法を説くまい、付法は護明比丘に付属する」と宣言、正法律運動からの隠遁を表明。
- 1767 (50歳) 『普賢行願讃聞書』を著わす。
- 1770 (53歳) この頃、全千巻より成る『津梁』の全容をほぼ完成させていたと伝えられる。
- 1771 (54歳) 雙龍庵時代を終え、京の阿弥陀寺に晋住。
- 1773 (56歳) 『十善法語』の法話を行う。
- 1775 (58歳) 『十善法語』完成。
- 1776 (59歳) 高貴寺に移る。
- 1779 (62歳) 『教誥』を草す。
- 1781 (64歳) 『人となる道』（初編）を著わす。
- 1783 (66歳) 『表無表章随文釈』5巻成る。
- 1786 (69歳) 『高貴寺規定』13条成る。
- 1788 (71歳) 夏、『日本書紀』神代巻を閲読し、神道を明らかにするために『無題抄』を著わし、神道研究へと進む。
- 1792 (75歳) 12月『人となる道 神道』（第3篇）を著わす。
- 1795 (78歳) 『両部曼荼羅隨聞記』（上下、弟子筆受）、『曼荼羅傳授目録』（同）を著わす。
- 1796 (79歳) 8／9月、弟子たちのために『神道灌頂教授式』（弟子筆受）を実施。

- 1797 (80歳) 4月『人となる道 略語』(弟子筆受)成る。
1798 (81歳) 1月『神代要領』成る。
1799 (82歳) 10月『神道三麻耶式』成る。
1800 (83歳) 春『比登農古乃世』、『金剛般若経講解』成る。
1801 / 2 (84/5歳) 『神儒偶談』完成。
1802 (85歳) 『金剛薩埵修行儀軌私記』成る。
1803 (86歳) 2月『理趣経講義』を著す。
— 3月『法華陀羅尼略解』を著す—
1804 (87歳) 金剛経の講解を行う。
1804年12月22日 遷化、高貴寺奥の院の廟に眠る。

— . —

- 2004年「慈雲尊者二百回遠忌の会」の企画により、大阪市立美術館、静岡三島佐野美術館において「心の書 慈雲尊者」が開催される。
2009年 第14回国際サンスクリット学会開催に伴い、京都大学において、高貴寺所蔵写本をもとに企画展「慈雲 原点を求める心」が開催される。

3. 図書館展示・展示書目と解題

初めに、展示ポスターのために、大阪・田辺の法楽寺より、当寺所蔵の「雙龍庵巖上座禅像」掛軸について電子データを無償で提供していただいた。ご厚意に厚く御礼申し上げます。この掛軸には、慈雲による次のような七言律詩が記されている。その解題は『慈雲尊者全集』第15巻に「法楽寺蔵」との注記の下に収められている。

山中従来無曆日
寒盡花開萬国春
滿林清風静夜月
天長地久與誰人

また会場のみで登場するパネルとして、黒川古文化研究所(兵庫県)より拝借した「山本義照筆 慈雲尊者合掌立像」を用いさせていただく。

さて展示は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの4部構成とした。Ⅰ 慈雲の筆跡、Ⅱ 慈雲の軌跡、Ⅲ 慈雲の宇宙、そしてⅣ 梵学史の金字塔「梵学津梁」である。このうち慈雲自身に関わるのはⅠ・Ⅱ・Ⅲである。以下、カッコ内に収めた数字は、当該著作が「梵学津梁」のなかに含まれることを示す証左として、『慈雲尊者全集』の総目録をはじめとする他の文献を引用したものである。従って特に注記しない限り、『全集』第9巻下の頁数を表わす。

I 慈雲の筆跡 自筆本3点

1) ハ320-59『法華陀羅尼略解』

これについては次節に翻刻を含めて後述する。

2) チ590-10『梵学津梁略詮阿字部』略詮第五之一

『略詮阿字部』卷三は慈雲の直筆である。第1丁冒頭に「略詮第五之一」とあり、「a字」との見出しの下、該当する漢字(訳字)がまず横に並べられ、それぞれの漢字を充てた訳者・辞書などの典拠が順にその下に示される。(これは「一字門」に当たる)。第2丁は「二字門」となり、今度は梵字二字より成り、一字目がa字となる語彙がまず横に並べられ、それぞれの訳語が順にその下に示され、典拠も併せて明示される。その際、たとえば『唐梵語』であれば広く略示し、『梵語千字文』であれば「千文」と略される。

おそらくこの形式は、該当の見出し語が増えてゆく段階、つまり辞典編纂途上の下書き原稿に当たるのではないかと推測される。これは体裁を整え、略詮といえども文章化されて、写本を生むころには整備された外見を呈する。その意味ではこの『略詮阿字部』は、辞書冒頭に当たるものの下書き原稿ということになり、きわめて貴重な価値を持つものと言えよう。ちなみに高貴寺DVDにおいては、同形式のものはka部以下の梵字に関して0293が該当するものと思われるが、a部に関してはもちろん、整備された後の筆者本しか見当たらない。

なおこの書目に関しては、本稿第7節においても若干言及する。

3) チ590-1『五十字門説』『警發地神偈譯互證』(二合)。前者「雜詮」訂正「別詮第四之二十四」599(447頁)、後者「通詮第三之十五」(436頁、末詮之四)

この本は合本であり、前半と後半に分かれる。慈雲の自筆になる部分は前半部である。まず前半部には、第1丁表におそらく慈雲の字で「梵学津梁卷五百九十九 雜別詮第四之二十四」と記され、「雜詮」を訂正して「別詮四之二十四」599、と記し(cf. 447頁)、「五十字門説 五十字本説出佛本行集經第十一 涅槃經」とある。しかし次丁からは『佛本行集經』の順序が逆転する形で綴られている。すなわち「五十字門説」として『佛本行集經』に注を加えながら進む冒頭は6丁表である。巻頭からの順序を『佛本行集經』の順序に直して表せば6頁表⇒6裏⇒5表⇒5裏⇒4表⇒4裏⇒3表⇒3裏⇒2表⇒後記の順となる。この『佛本行集經』のテキストは、おそらく法樹によるものであ

ろう。これに慈雲が行間注を付している。これに続き、第7丁より慈雲の字で、谷川士清による『日本紀通証』1の「附録」とされている「倭語通音」(第7丁)、「仮字正文」(略式、第8丁)、「音韻類字」(「音類」、第9～12丁)と続き、第13・14丁は梵字による五十音図、第15丁と第16丁(表)は『日本紀通証』第2より「正通曰一物者開闢之靈也」に続く部分が引用されている。第16丁裏より18丁までは不明であり、第19丁表に「梵釈」とある。慈雲は『佛本行集経』に出る「悉曇五十字門」に対して神道系の「五十字(門)」を対置させ、いわば雲伝神道流の「五十字門説」を新たに立てようとしたものと考えられる。本著作は「高貴寺DVD」にも見当たらず、またいわゆる悉曇学による「五十字門説」に限られる著述でもないため、孤本である可能性が高い。

次に後半部であるが、第20丁表に覚禪の字で「梵学津梁 末禪」とあり、以下「警發地神偈」が始まるという構成になっている。そして第23丁ウラには「享和貳年次壬戌初夏撰陽大坂喜多之 大寶山万善寺写焉」とあり、これは享和2年(1802年)と推定される。「警發地神偈譯互證」は436頁に載る(末詮之四)。「全集」第17巻の136—7頁、過去帳には「正法律中覚禪示寂 文化12年乙亥12月 万善寺旧住。播州産也」とあり、1815年に没したことが知られる。この人物が筆写したと考えて間違いない。梵字表記は Buddha-dharma と読める。おそらく、覚禪は「菩提達磨」を梵字による筆名として用いていたのであろう。「覚」は Buddha であり、「禪」については、禅宗の初祖にして「円覚大師」を諡名に持つ達磨の名を充てたと考えられる。

なお大阪北野・万善寺は、慈雲系の正法律を奉じた寺であったらしく、他に寂然という僧侶が、伎人戒心の師として知られる。また木南卓一氏による新著『慈雲尊者の書』(2008年)は貴重な史料を博搜した高著であるが、同書15頁より大阪の俳人流水居士(前田旦住)による『慈雲尊者帰依因縁之記』が引用され、その中に慈雲による教化活動の場のひとつとして「浪花萬善寺」の名が挙がっている(16頁)。ただ現在、北野地区に万善寺という寺院は現存しない模様である。戦災により焼失したとも伝えられる。本書が万善寺所蔵であった可能性は否定できまい。

Ⅱ 慈雲の軌跡 ～正法律師・悉曇学者・密教行者としての慈雲～

- 4) ハ240—103『方服図儀』(「梵学津梁」雑詮補三／四)(板本) 寛永4年(1751年)

三十代なかばの慈雲が、正法律運動の一環として有馬桂林寺兼任時代に著したもの。高貴寺 DVD には収められていない。「剃髮染衣は諸佛の通儀，入道の初要，末世の真依，正法の柱礎なり。若し尚訛替せば亦何をか言はん。故に其の聖儀を述べて之れを有志に告ぐ」と明に撰述の意趣を述べている。その内容は 1 勸誡 2 勝徳 3 名義 4 制縁 5 正儀 6 証文上 7 証文下 8 斥非 9 問答上 10 問答下 の 8 章に分かたれ、如来親説に依り、賢聖の訓告に考え、義理の存するところを察して袈裟衣の正儀を略述している。

有馬桂林寺は当時、禪宗・紫野大徳寺の末寺となっており、これを慈雲が兼任した。その当時の袈裟の作り方に関して、慈雲が糾したものである。袈裟の作法は、前鉤後紐と言ひ、前鉤とは前の紐、後紐とは後の紐であり、これを引き合わせて前で括る。この鉤紐の付け方が乱れたため、肩に掛けたときに非常に無作法になっていた。これは支那唐朝の末頃からすでに乱れ、殆ど千年来の弊習となっていたが、慈雲が糾したわけである。

5) チ425-1 『悉曇字記聞書』

『慈雲尊者全集』所収のテキストとまったく同文である。慈雲は悉曇伝承の相承諸説について、次のように喝破している。「天台家安然の所立に四種の相承と云ふを立つ。1 梵天相承 2 龍宮相承 3 釈迦相承 4 大日相承 之も安然の牽強の説なれば」(全集161頁)。

6) チ425-2 『悉曇聞書』

『全集』所収のテキストと同文である。

慈雲には他に、明和 8 年 (54 歳) の折に著した『悉曇章相承口説』なる著述がある。一般に「日本の伝承悉曇学では、二字三字が連続するときに、本字にない空点 m や涅槃点 h を加えて読み、或いは本字を読まない慣例があり、これを悉曇連声という。まずこれに必要な三内について記すと、子音字の体文に喉・顎・舌・歯・唇の五声の別があり、喉声を喉内、唇声を唇内と言ひ、中間の顎舌歯の三声を合して舌内と呼び、これらを三内と称する。喉内の空点はウ、涅槃点はクまたはキ、舌内の空点はン、涅槃点はツまたはチ、唇内の空点はム、涅槃点はフと読む」(田久保周誉『梵字悉曇』164頁、平河出版社1981年)とされる。ただし慈雲の相承した悉曇における三内理解では (111頁)、現行悉曇学の「喉・顎・舌・歯・唇」の順が「牙・歯・舌・喉・唇」となっており、喉内・舌・唇内を三内と理解しているようである。

さて悉曇連声に、東密では二体連続と一体不絶の 2 種、台密では第十五章声、

加他摩多声、自音成他声、他音属自声の4種を数える。しかし東密相承では、台密のものを悉く安然所伝のものとして否定している(89, 91頁)。

さらにこの悉曇連声には「麤頤(ソケン)・栗密(ネンミツ)、音便・不音便の別がある。体文(子音文字)を5類声と遍口声とに分かつとき、下が5類声の字で上に空点を読み、或いは下が遍口声の字で上に涅槃点を読むのが麤頤の連声であり、下が5類声の字で上に涅槃点を読み、あるいは下が遍口声の字で上に空点を読むのが栗密の連声である」と田久保氏は続けるが、慈雲に相承された悉曇灌頂にあって、師の忍鋼貞紀は「安然の麤頤栗密を立てらるる、並に相承なき故なり」(97頁)とする。

忍鋼貞紀の相承が、きわめて厳格な「相承」主義であり、これが慈雲における悉曇学の方向性を決定づけたと言えるだろう。

7) ハ320-49『普賢行願讚の示』「末詮第二之」

この「普賢行願讚」には、現在仏教諸宗派の日常勤行に広く取り入れられている「懺悔文」(我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴 従身語意之所生 一切我今皆懺悔; 般若訳「四十華嚴」[大正293;「貞元経」]による)が含まれていることで知られる(第8頌; 第29-32句)。本学所蔵のこの著作写本には、慈雲による逐字釈が付されているが、これは不空訳「普賢菩薩行願讚」[大正297]に基づく。このほか仏陀跋陀羅による「文殊師利発願経」[大正296;「晋経」]が同一原典からの訳文である。現在では、デーヴァナーガリー表記による梵本とチベット語訳を付したテキストも公刊されている(Sushama Devi (ed.), *Samantabhadracaryā-praṇidhānarāja*, New Delhi 1958; 本学所蔵)。

高貴寺 DVD 0108には、法樹による1804年阿弥陀寺にて書写された同本がある。このデータも、本書が阿弥陀寺廃寺の際の売却本である可能性を高める。

8) チ590-11, 12『七九略鈔』[通詮第三之二三]。

悉曇の語法を述べた書である。初めの3巻は蘇漫多に関する釈で、八転声のことを述べ、後2巻は底彦多に関する釈で、三説声三言声のことを述べている。書名の七九とは、七転・二九韻の称に因んで付けたものである。明和二年春雙龍庵にて、語明、法護、諦濡等に普賢行願讚梵本を講じたときの筆録であり、その「科全」は全集459頁に載る。

9) チ590-13, 14『七九又略』[通詮第三之二四]。

445頁に第441として「七九又略」一巻が載る。

『七九略鈔』の追記と目すべきもので、明和九年刊、語明記、焼け焦げがある。

10) ハ320-41 『大樂金剛薩埵修行成就儀軌』(大樂軌)〈飲光補訂〉

理趣経系の儀軌であるとされる一方、金剛頂経十八会のなかでは第八会「勝初瑜伽」、普賢の宮殿で説かれたともされる。『理趣経』の記述とは一致しない一方で、『金剛頂経』初会成身会とももちろん一致しない。金剛界曼荼羅の第7会「理趣会」の儀軌化だと言える。慈雲は末尾に「此中梵釈未詳悉。別有釈義」と記し、『理趣経』そのものに関心があったわけではないことを示唆する。すなわち慈雲にとって、主たる関心は常に梵文を骨格としておよそあらゆる儀軌を修法することにあつたと言えよう。

慈雲のテキストには、『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王経』(不空訳、上下2巻本；大正大蔵経 no. 874) より、一般的儀礼の普遍的部分を多く含む。

『慈雲尊者全集』所収のものとは、『大正大蔵経』所収のものとは細部において異なる。本学所蔵のものは、『全集』所収のものが「私記」という附題を含むのに対し、これを有さないという点が異なるが、この点を除き、同一テキストだとしてよい。

次第としては、冒頭は1119ではなく、ほぼ大正1123の冒頭部より始まる。大正874(2巻本教王経)冒頭の儀を、冒頭部に大幅に取り入れている。また金剛起と五悔の部分は一般的金剛儀軌にならって挿入してある。それ以外は大蔵経のテキストと同様である。五悔を入れるが、慈雲はこれを「普賢行願」と解している。もとより両者の内容は同一である。なお「五供養」とは、塗香・華鬘・焼香・飲食・灯明の五つであり、これに閻伽を加えて六種供養ともする。

11) 『梵文金剛般若経諸訳互証』河州高貴寺沙門法樹 纂校』 梵学津梁卷320 末註第二之十二

本書はこの展示会のために、高貴寺現住職前田弘隆和上より贈呈されたものである。慈雲が最晩年『金剛般若経』の講解をおこなったことは伝えられているが、この經典についても「諸訳互証」を行うことを望み、果たせずにいたのを、法樹が慈雲の遺志を継ぎ、十年以上をかけて完成させたものだという。慈雲門下には慈雲ほどの梵学者は遂に現れなかったとされるが、その中で傑出していたのが法樹であったのは間違いないであろう。

Ⅲ 慈雲の宇宙 ～『梵学津梁』の写本類～

12) ハ320-25『諸讚訳語陀羅尼等雜集』本詮第一之一三〇〔435頁〕

本著作は高貴寺 DVD にも見当たらず、今後慈雲の直筆本が現れない限り、孤本写本である可能性がある。

13) ハ320-37『大佛頂陀羅尼；寶樓閣經梵字；梵字千臂甘露軍荼利真言；吉慶讚』本詮第一之七～十四〔411-412頁〕（板本）

本作品は高貴寺 DVD では0009, 0010, 0011として分類されているものと思われる。

14) ハ320-53『大佛頂陀羅尼略句義』〔436頁：末詮第二之五；十八〕

本著作は高貴寺 DVD では0095に現れる。

15) ハ320-58『法華陀羅尼諸訳互証』〔末詮第二之八〕

本著作は高貴寺 DVD 0119と体裁が完全に一致する。したがって同本を筆写したものであることは明らかであり、実際筑波大蔵のものには「別本在于阿弥陀寺」と記載がある。本学所蔵悉曇書コレクションが、阿弥陀寺廢寺時の流出本である可能性を高める。なお『法華陀羅尼諸訳互証』の筆跡は、『大樂金剛薩埵修行成就儀軌』の筆跡と酷似しており、おそらく梵字を能くした尼僧による筆写であると思われる。新出の『法華陀羅尼略解』との関連で後述する。

16) チ590-2『怛多羅鈔』通詮第三之十一

本著作は高貴寺 DVD にも見当たらず、今後慈雲の直筆本が現れない限り、孤本写本である可能性がある。

17) チ590-16『成就吉祥儀』「梵学津梁通詮第三之五」。

本著作は高貴寺 DVD では0186, 0187に分類されているものである。

18) チ590-17『景祐《2年, 1035年》天竺字源梵文新定』惟淨；『天竺字源』443頁（通詮第三之九 もしくは別詮第四之二十四）。

高貴寺 DVD には0216として「梵学津梁通詮天竺字源四之六」が載るが、内容的に本学所蔵本とは一致しない。孤本の可能性がある。

表見返しに『梵学津梁卷八十三』とある。安永9年（1780年）12月の日付、「在畑村大日堂」および「小子尼宗悟敬拝書写」の記がある。この尼宗悟は、慈雲の別の著作『沙弥十数』を記したことで知られ、その奥付によれば「長福寺宗悟尼」とされる。また高貴寺 DVD にもいくつかの写本の筆記者として現れる。この長福寺とは、京都の尼寺長福寺である。この宗悟尼による写本は、飲光による写本の写しである。宗悟に関しては『全集』第17巻所収の「西京阿弥

陀寺過去帳」7日の項に「香山宗悟式叉摩那」として挙がる。それによれば「天明八戊申九月申刻華城愛宕町寓居卒。八日自宝称庵茶毘高井田村墓所。葬遺骨西坊之墓。存生四十歳」とあり、1788年に没したことが知られる。

なお宗悟尼は、梵字において達筆であったことが『悉曇章相承口説』の後記より知られる。それによれば『慈雲尊者全集』編纂時に、梵字の型を取るために用いたのがこの宗悟尼による筆記体であったという。

19) チ590-19/22『梵學津梁廣詮天象部』廣詮第六之七／八『梵學津梁略詮三寶部省要』『梵學津梁略詮三寶部省要』略詮第五之二／三

本著作のうち、まず『天象部』は高貴寺 DVD 00352に一致する。だが『三寶部省要』『三寶部省要』に関しては、完全に体裁が一致するものは現在のところ見つかっていない。

20) チ590-23『梵文助声歌／山門東寺連声弁』;前半「雜詮第七之二十二」(460頁)、後半「雜詮」(490頁)。

本著作の前半部は高貴寺 DVD には見当たらず、高価値の写本である可能性がある。後半は高貴寺 DVD 0411として分類されているものである。

21) チ590-18『唐梵雜名千鬘畫引』別詮第四之一／二

梵語語彙に対し、漢字による語釈を付した三作品（「唐梵文字」「梵語千字文」「梵語雜名」）について、その各編に見られる語釈漢字を総画数順に配列し、その掲載頁を「广×右 ○ 文×左 ○ 佳×右」のように、略字と頁数（×）を用いて示したインデックスである。つまりこれは漢字から梵語語彙を引き当てるための「画引き漢梵辞典」であり、慈雲がすでに『理趣経講義』で展開するような「還梵」の発想を抱いていたことをうかがわせるに足りる。三作品のうち本学図書館には「梵語千字文」の写本は収められていないが、「梵語雜名」の板本（「慈覚大師請来」）、および「唐梵文字」の写本は所蔵され、この『唐梵雜名』に挙がる各々の頁数と一致することが確認されている。したがって、板本に関しては流布本の使用であるため特記するには当たらないものの、「唐梵文字」については、当館所蔵の写本を用いてこの『唐梵雜名』の編纂執筆が行われたことが确实視される。

IV 梵学史の金字塔としての「梵学津梁」 ～日本悉曇学史を辿る～

第IV部には、悉曇学史上の名著とされる諸作品を展示する予定である。とこ

ろが、意外なことにすべてがすべて高貴寺 DVD に収められているわけではない。『韻鏡』その他が収められていないことは、高貴寺 DVD に関する疑問点として残る。「梵学津梁」以外の部類に含まれてしまったのであろうか。未詳である。

22) チ590-5 『唐梵文字』(唐・全真) 別詮451

高貴寺 DVD 0248 『梵唐文字』に該当するのかどうか、未詳である。

23) チ425-4 『梵語雑名』(唐・礼言・839-集/眞源較) 別詮第四之四(板本)
(大蔵2135)

高貴寺 DVD 0246および0247に分類されている。版本でもあり、広く流布したことが知られる。

24) チ425-8 『悉曇字記』(唐・智廣著) 貴重書

通詮第三之三(大蔵2132)

『悉曇字記』は、およそ悉曇学の基礎中の基礎とも言うべき書目であるにもかかわらず、高貴寺 DVD に「悉曇字記」という題目で挙がるものが皆無であるのは不思議である(0236-0240 『悉曇字記鈔』は別作であろう)。

25) チ425-40 『中天悉曇章』(空海 774-835) 通詮第三之一

台密の系統が南天、東密の系統が中天であることはよく知られているが、詳細は今後の解明に待ちたい。

26) チ425-5 『悉曇私(林)記』(宗叡 809-884) 1巻

通詮第三之四

高貴寺 DVD では0182および0183に挙がるものである。一方0380にも挙がっており、分類の徹底不十分かと思われる。慈雲は安然らの説を排し、代わりに採るべきものとしてこの宗叡の『林記』を挙げることが多い。それは宗叡が、慈雲と同じく東密相承に属し、空海以来の相承を墨守することによる。

27) チ425-13 『悉曇蔵』安然(841-915) 8巻

別詮第四之七(大蔵2702)

日本の悉曇学の主流を形成してきたといっても過言ではない重要書目であるが、慈雲自身は相承を異にすることもあり、随所に安然の説を批判している。単なる参照文献としての扱いを受けた書目が「雑詮」となり、逆に言えば「雑詮」に含められたものは慈雲と説を異にするものだ、というのが従来の考え方であった。安然は従来の目録類では別詮に収められていた。慈雲自身の言から

すると、雑詮に入っても不思議ではなかったのだが、新版高貴寺 DVD は実際に「雑詮」に収められてしまっている (0353-0360)。これが、慈雲が後に分類の考えを改めたことによるのか、新たに分類を施した諦了和上の考えによるのか、現時点では不明である。次の『悉曇要訣』は、従来の「目録」では別詮扱いであったが、こちらは新版高貴寺 DVD でも別詮に分類されている。

28) チ425-30『悉曇要訣』(明覚〔1056-1101〕著) 貴重書 別詮第四之十 (大蔵2706: 仏書354)

高貴寺 DVD では0256に収められている。

29) チ590-4 要『梵字形音義』(明覚 1056-1101) 4 巻
雑詮第七 (941)

高貴寺 DVD には見当たらない。

30) チ530-658『韻鏡』貴重書 雑詮第七 (972)

上述したように、高貴寺 DVD には見当たらない。もっとも慈雲は『悉曇聞書』その他の著述において、『韻鏡』に見られる反切などの方法を用いて説明を行っている。

31) チ530-432『磨光韻鏡』(1744年刊, 文雄 1700-1763) 雑詮第七 (973)
わが国における『韻鏡』の受容を示す重要資料であるが、これも高貴寺 DVD には見当たらない。

32) ハ300-212『多羅葉抄』心覚 (1117-80) 別詮第四之六

現存しかつ作者の判明するわが国最古の梵語辞典として重要であるが、高貴寺 DVD には収録されていない。

33) チ425-24『悉曇字記創学鈔』杲宝 (1306-62)・賢宝 (1333-98) 11巻
東寺観智院 雑詮第七之一

東寺観智院のレベルの高さを実証するような重要書目である。高貴寺 DVD には0371以下に収められているが、完本ではないようで、本学所蔵本が11巻揃であることは意義深い。

34) チ425-17『悉曇考覈(コウカク)抄』宥快 (1345-1416) 3/4 巻 高野
山宝門派 雑詮第七 (956/68; 456/9 頁)

これも高貴寺 DVD には挙がらない。

35) チ425-3『悉曇三密鈔』浄厳 (1639-1703) 7/8 巻
雑詮第七之二 (大蔵2710)

江戸に湯島靈雲寺を開いた密教の巨匠である。高貴寺 DVD では0361から

0367に挙がる。

36) チ425-55要『梵字通同考』曇寂(1674-1742) 別詮(472頁)

五智山に晋住し、慈雲にいたる梵学の相承を知る上で重要な人物である。高貴寺DVDには挙がらない。

37) チ425-33要『梵字悉曇章稽古録』寂巖(1702-1771)

雑詮第七之十三

岡山宝島寺に晋住した僧である。元来南天相承に発する『悉曇字記』そしてその系統を受け継ぐ『悉曇十八章』の系統を廃し、空海が請来した「大悉曇章」系統の相承を復興させようと孤軍奮闘したものの、大勢を変革するには至らなかった。慈雲も悉曇学入門に関しては「悉曇十八章」の学習を奨励している。

〈参考展示〉 3点

38) 188.5 J 55 『慈雲尊者全集』首巻～第17大尾

39) 『長谷宝秀全集』全6巻

長谷宝秀和尚(1869-1948)は、『慈雲尊者全集』の編纂者であると同時に、その全集第4・5巻には、1938年に初版が刊行された「(弘法)大師御請来梵字真言集」(上・下)が再版されて収められている。以下に見るように、「梵学津梁」の冒頭「本詮」の最初には「弘法大師請来梵本」42部44巻が収められているため、「梵学津梁」全体の理解を助けるものと考え、併せて展示する。

40) ① 811.1-Ma 12 馬淵和夫『日本韻学史の研究』(増訂版) I・II・III, 臨川書店 1984年。

② 『梵字悉曇資料集成』, 東京美術 1980年。

③ 『悉曇章の研究』, 勉誠出版 2006年。

本学における悉曇学の伝統を築き上げた国語学の巨匠である。現在の国語学研究室からは、その学統は失われている。なお馬淵教授は江戸期以前の悉曇学史の専門家であり、慈雲の梵学に対しては、既に西洋世界との接触を得た者の感覚と評価して、これを研究対象から外す傾向にある。教授によるそのような慈雲評価は、必ずしも正当ではない。

このほか、併置されるパソコン・コーナーには、新たに入手した高貴寺DVD, すなわち「高貴寺蔵書リスト 梵学津梁」(2008年11月DVD版完成, 2010年6月増補)を閲覧可能な状態にしておく予定である。

4. 『法華陀羅尼略解』解説

さて、筑波大学附属中央図書館所蔵（和装古書ハ320-59）の『法華陀羅尼略解』は、慈雲の特徴的な筆致によって記されている。巻末には「享和癸亥三月四日小子記」とあるが、これは享和3年（1803年）に当たり、慈雲の没年（1804年）の1年前である。慈雲が好んで用いた Kaśyapa（飲光）の梵字表記があり、臘六十四／行年八十六と記されている。間違いなく慈雲の真筆である。

この著作は、上述したように「法華経」に含まれる6個の陀羅尼を釈したものである。「梵学津梁」所収の著書として、慈雲には他に『法華陀羅尼諸訳互証』が存する（上記展示書目15参照）。だが、この『諸訳互証』が『正法華経』を含めた既存訳数種を比較対照していたのに対し、『法華陀羅尼略解』は『正法華経』の語釈のみを対置したうえで、慈雲による句釈を付したもので、比較的簡素な体裁を採る。「諸訳互証」というタイプの著述は、『普賢行願讃』や『般若心経』『阿弥陀経』などに関して慈雲が一貫してまず用いたスタイルであり、既存の各種漢訳仏典を可能な限り蒐集し、入手しえた梵本と対照させることで梵文句の意味を推定してゆく方法である。梵語文法の正確な知識がほとんど伝えられなかった江戸期までのわが国にあって、慈雲以前の悉曇学が梵字の書法・発音の習熟と梵単語・漢訳語義の収集に終始していたのに対し、慈雲が体系化したこの方法は、きわめて画期的なものであったと言えるだろう。けれども慈雲はさらに、この「諸訳互証」で得られたデータを基に、今度は既存の漢訳仏典から梵文原典を確定する作業を開始する。これまで最晩年の著作とされてきた『理趣経講義』に関しては、そのような「還梵」の意義が称揚されることが常であった。しかし慈雲にとって、そのような語学面での自身の卓越性を証することが本意であったのではない。釈尊在世中の仏法を「正法」とし、「正法律」を主唱しつつ、梵学を含めおよそあらゆる手段を用いて正法の復興に努めた慈雲にとって、目指すはあくまで、梵典に基づいた諸儀軌の遂行であり、梵典をめぐる絶えざる観想なのであった。

従来、享和3年2月24日に校了を見た『理趣経講義』が慈雲最晩年の主著とされてきた。もっとも正確にはこの2月24日校了のものは『大日経第三悉地出現品梵語』そして『教王経初品梵語』であり、慈雲がこのころ両部の経書・儀軌に関して集中的に還梵と梵文釈を行っていたことが推察される。今回新たに発見された『法華陀羅尼略解』は、そのおよそ十日後に完成したことになる。真言律系の慈雲にあって、天台法華系経典への傾きは意外とも受け取れるが、

ここに含まれる6個の陀羅尼は、不空訳による『観智儀軌』（『成就妙法蓮華經王瑜伽観智儀軌』）の中に取り込まれ、胎藏部法と金剛界法を併せ含んだ儀軌として整備されている。したがって慈雲は、この『法華陀羅尼』を、両部の観法儀軌の根幹を成す陀羅尼として取り上げたものとまず考えられよう。遑って1802年、慈雲は『金剛薩埵修行成就儀軌』を補訂し（上掲展示書目10参照）、『金剛頂經』系の観法伝授に努めている。『理趣經』にしても、真言宗の常用經典であると同時に、金剛薩埵を主尊とする五秘密瑜伽の秘法である。また金剛薩埵は普賢菩薩と等置されるが、『普賢行願讃』は慈雲に梵学専修のきっかけをもたらすとともに、「懺悔文」などをも併せ含むところから、戒律の墨守を絶えず想起させ、慈雲が生涯にわたって重んじた梵典であった（上掲展示書目7参照）、この『法華陀羅尼略解』冒頭「藥王菩薩呪」の句釈部には、「この呪は八正道を唱ふるものなり」との、正法律に専心した慈雲ならではの見解が表明されている。

これと併せて考慮されねばならないのが、本著作が今日までまったく他所の記録を有していない、という点である。本稿でたびたび参照してきた高貴寺DVDにも同一の著作は拳がらない。時期的に直前に位置する『理趣經講義』は、「講義」でもあり、弟子たちを前に行われたものであり、また慈雲直筆の原稿が残る（高貴寺DVD 0453, 0154, 0155）。おそらくこの『法華陀羅尼略解』は、慈雲がひっそりと独り観想の実りを書きとめた、との印象がある。それが阿弥陀寺であれば、弟子たちにこの著作が知られることもなく置かれていた、と十分に考えられよう。この著作は「孤本」である。

5. 「法華陀羅尼略解」翻刻

では次に、『法華陀羅尼略解』の翻刻に移るが、一般に悉曇文献を扱う際に問題となる点がある。近代的サンスクリット学の発展により、現在では梵文そのものの精確なテキストが明らかになり、またそれが公刊されている場合が多い。この場合であれば『梵文法華經』あるいは『陀羅尼辞典』の類である。それに照らすと、慈雲の掲げる梵文、あるいは伝承された梵文（弘法大師将来本など）には細かい誤りが散見される場合が多い。その際、梵文部分だけを精確なテキストに改めるべきかどうかがまず問題となる。もとより慈雲が、梵文法の微細な部分にまで顧慮して釈義を行っているわけではないため、以下、本稿では、伝承されたかな書き（さらには漢字）での音表記による陀羅尼の発音を

参考にしつつ、慈雲が読んでいる陀羅尼テキストを掲げること努めた。察するに、慈雲にはまず、普段儀軌等で慣れ親しんでいる「音」の世界があるはずだからである。したがって梵文としての文法的正確さ等は顧慮していない。

(第1丁～第17丁 = 1頁～34頁)

法華陀羅尼品 竺法護句義 Kāśyapa 謹記

①葉王菩薩陀羅尼 (1頁～16頁)

tad-yathā 将来本欠此一句

尋咒曰 竺法護 即說咒曰 羅什

anye 梵文弘法大師将来心覺真言集 句義正法華

奇異

a 是本初声 nya 声明中衆多声 e 点陀羅尼中有此声是呼声歟或呼鬼神名或唱法句

...之所在現 maṇḍala 界会能作世出世之利益安樂也此陀羅尼之初句奇異義可思

manye 承上 anye 而云..

所思

mana 意也 ya 是有所作之辞

manye

意念 大凡陀羅尼重疊之語下重於上或別有所命也

mamanye

無意

上之 ma 通于 a 無義

四句並以 nya 字而唱出

cire

永久 cire 日貝貝亦.. cire ṇaḥavanta 永久之字体中有行義可知

carite

所行奉修 cara 行也 ite 之助声成奉修事深趣

二句以 cara 行声而唱出 e 声劣流便大凡密咒之劣儀不当字義句義含藏彰德難量音之流便応四種相応而成其事業也 (4頁)

故一阿点一曳声所容易也

上文所思意念等正念正思惟之行永久不退是正精進義耳

śānte

寂然

奢唐 (梵文字) 他止也

śamitā vi-

tava 之字体勝上義如実義 i,e 音之本末相通

澹泊

śānte

志默

右三句 śa 字本性寂義為要正定之義

mukte

解脱

muktame

济度 me 自説上土之言成济度

二句 mukta 唱出是正戒義

sama

平等

aviṣame

無邪

a 無 viṣa 毒三毒之毒

saumi

安和

sami

普平

四句除第二句並 sama 唱出蓋正命之趣 但第二句 ṣame 之言亦音近 sama

kṣaye

減盡

akṣaye

無盡

akṣiṇe

莫勝

三句 kṣa 字唱出是正見之趣

sānte

玄默

śami

澹然 上寂然澹泊此玄默澹然其義不遠蓋此中正見中之玄默乎

dhāraṇi

總持

āloka-bhaṣai paśavekṣaṇi ※なお 5 頁, この梵文箇所にのみ, 左側に他者の筆跡により朱字で bhaṣai 光 paśa 見 ve 俱 kṣa 盡 ṇi 期と語釈が付してある。これは bha 字が慈雲自身のテキストには脱落していたため、この筆者がこの bha 字を補っている。この筆者については、第 1 章に記したように、伎人戒心かと思われる。

觀察

義訳乎 āloka 所暗 bhaṣai 光 paśa 見 ve 俱歟皆也 kṣaṇi 盡期明与無明悉的于玄默故云觀察

此三句並 vekṣaṇi 与上三句是一條

nevite

光曜

abhyantala-neviṣṭe

有所依倚恃怙於内

atenta-pāriśuddhai

究竟清淨 句義欠 atenta

utkule

無有坑坎

mutkule

六無高下

arale

無有回旋

parale

所周旋処

śukāṅkṣi

其目清淨

akṣī 目歟 śukā 清淨

正見之義

āsamasame

等無所等

buddha-vikriḍite

覺已越度

已字梵文不見義如乎

dharma-parīkṣite

而察於法

而字梵文不見

saṃgha-nirghoṣāṇi

令衆無音

正語伏他之功

bhāṣabhāṣasoddai

所說鮮明

mantrē mantrākṣayate

而懷止足

uruta

盡除節限

ruta 音

uruta-kausalya

宣暢音響

akṣayatāya

而了文字

avaro

無有窮盡

amadyanatāya

永無勢力無所思念

已上藥王菩薩咒八正道之功力護持法（16頁）
華於末世歟

②勇施菩薩陀羅尼（17頁～20頁）

tad-yathā

jvale

晃曜 智慧

mahā-jvale

大明

炎光

mukke

演暉

光照十方

ane

順来

内外上下

alavate

当章

到处除闇

nr̥te

悦喜

nr̥tivati vati 具歟

欣然

itt̥ini

住此

vitt̥ini

立制

citt̥ini

永住

nr̥tt̥ini

無合

nr̥tt̥ivate

無集

勇施菩薩陀羅尼初五句光暉演暢後六句法喜永住
六句中初二句 nr̥ 字唱出後四句 tt̥i 字介布

③毘沙門天王咒（21頁～23頁）

ali

富有

nali

調戲

notali

無戲

anālo

無量

nāmi

無不富

kunāmi ku 字疑之辞何義

何不富

富有法尔於世起調戲 此調戲本来無

戲此無戲受用無量一切時处無不富何

不富 右多聞天之護法

④持国天咒 (23頁～26頁)

agaṇe

無数

gaṇe

有数

gauri

正法華欠句義 白 又 嚴惡

白身

胎軌但 gauri gori 二本

gandhāri

的翻賊但外道亦有 gandhāri 咒

持香

caṇḍāli

曜黑

又暴惡義

mātongi

残祝

外道咒

saṃśuli

大体

毒虫主有常求利咒

vrūsaṇi

千器順述

将来本欠此二字

ati

暴言至有

右持国天咒

⑤十羅刹女咒 (26頁～27頁)

itime itime itime itime itime

於是 於斯 於尔 於氏 極甚

指示声五偏至第五偏義成沈重

nemi nemi nemi nemi nemi

無我 無吾 無身 無所 俱同

rūhe rūhe rūhe rūhe rūhe

已興 已生 已成 而住 而立

stahe stahe stahe stahe stahe svāhā

亦住 嗟歎 亦非 消頭 大疾無得加害

(28頁) 右十羅刹

⑥普賢菩薩陀羅尼 (28頁～34頁)

adaṇḍai

無我

人法二空

daṇḍapatai

除我

斷習氣

daṇḍavarte

回向方便

普皆回向

daṇḍakuśale

賓仁和除

恒順衆生

daṇḍasudhāre

甚柔軟

sudhāre

甚柔弱

sudhāra-pate

句見

buddha-paśyanye

諸佛回

見諸佛

sarva-dhāraṇi āvartane

諸總持

欠軛義

sarva-bhāṣyāvartane

行衆説

諸転法輪

suāvartane

蓋回転

saṅghapariḥṣiṇe

盡集会

随喜功德

saṅgha-nirghoṣani

除衆趣

asaṅghi

無央数

saṅghapagatai

計諸句

treadhva-saṅghatulya-arate-parate

三世数

句義契訳相應

sarvasaṅgha-samātikrantai

越有為

sarvadharmā-supariḥṣite

学諸法

sarvasatva-ruta-kāuśalyānugatai

曉衆生音

siṅha-vikritrite

師子娛樂

已上普賢咒竟

不空本此下有

anuvartta varttine varttāri svāhā 之句

隨転聖説而奉行受持

享和癸亥三月四日小子記此略示 但陀羅(尼)甚奥

豈得浩海一滴乎 且録信解之介(耳) Kāśyapa

臘六十四 行年八十六

6. 「法華陀羅尼略解」 解題

上掲のように、卷末には「享和癸亥三月四日、小子此の略示を記す。但し陀羅尼甚奥なり。あに浩海の一滴を得んや。まさに信解を録さんとするのみ。飲光。得度後64年、行年86歳」とあり、年老いてなお謙虚にしてあまりある慈雲の姿を目の当たりにすることができる。

以下、この『略解』をめぐって想定される事柄を書きとめておく。

1) 注解の性格。

1. 鳩摩羅什らによる訳文では、陀羅尼に関して音写が行われているに過ぎない。それらはすでに作成した『諸訳互証』において逐一比較検討を施したが、そこでは解釈が行われることがなかった。ここでは一步踏み込んで、内容的な解釈に至っている。したがってここで参照されているのは、事実上、語釈を付したと言える『正法華』のみである。
2. 慈雲は、薬王菩薩咒の末尾に「末世における法華の八正道の功力護持か」と自らの理解を提示している。八正道とは、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を指す。この『略解』の中で具体的に指示がなされているのは、正精進、正定、正戒、正命、正見、正語であり、戒目として一致しないものもあり、また八個全体におよんでいるわけでもない。しかし全体的に見て慈雲のこの解釈は至極穏当かつ的確なものと言える。十善戒を説いた慈雲に相応しい解釈とも考えられよう。
3. 巻末では不空訳『観智儀軌』からの付加句を参照している。この前年に『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』（展示書目10参照）を註解している慈雲でもあり、晩年に至って儀軌類の伝授に余念がなかったことをうかがわせる。『観智儀軌』は、『大日経』『金剛頂経』による両部の密教に基づく法華経解釈を展開したものであり、その中核を形成するのは「法華陀羅尼」にも現れる6つの陀羅尼である。慈雲がこの『観智儀軌』を念頭に置いてこの『法華陀羅尼略解』を著したことは間違いないと考えてよからう。

2) 『理趣経講義』との関係

従来、慈雲の著作としては、享和3年2月24日に校了を見た『理趣経講義』が最晩年の主著とされてきた。今回公開する『法華陀羅尼略解』はそのおよそ10日後に完成したものとなる。これまで最晩年の著作とされてきた『理趣経講義』に関しては、「還梵」の意義が称揚されるのが常であったが、本著作は漢梵部分を含まない。したがって慈雲の目指したものが、梵典に基づいた諸儀軌の遂行と、梵典をめぐる絶えざる観想であったことの適格な証左となる著述だと言えるだろう。

3) 著作の場所

『法華陀羅尼略解』は高貴寺DVDにも収められていない。したがって、お

そらく阿弥陀寺が廢寺になったおりに、一部は神光院などに移されたものの、売却されたものもあり、これが流れて東京師範蔵書に入り、その中に慈雲自筆の『法華陀羅尼略解』もあったと推測できそうである。したがってこの著作を執筆した頃、慈雲は阿弥陀寺に起居していた、と推察されよう。

本著作はさらに、今日までまったく著作として確認されたことがなかった。慈雲に関する年譜・研究書の類、あるいは弟子による伝記の類にもまったく姿を現さない。この著作はまさしく「孤本」と呼ぶにふさわしい。

4) 後出の台密系・諸『法華陀羅尼釈』との関係

この著作が京でしたためられたとすれば、比叡山台密系との関連の有無が問題とされ得よう。慈雲の同時代人では、近江園城寺敬光（1714—95）が慈雲に悉曇を学び、『法華梵釈講翼』1巻を著したとされる。この著作（異題同内容か）は最新の高貴寺DVDに収められている（0438）。敬光の没年が慈雲の示寂の年よりも遡ることから、この作品は「梵学津梁」の雑詮に載り、多少なりとも慈雲に対して敬光が影響を及ぼしたことは考えられるだろう。一方、敬光門下の敬長と交遊を持ったという伊勢西来寺の真盛派宗淵（1786—1859）は『梵漢字法華陀羅尼』ほかを著しており、慈雲の本著作以降に位置する。もし宗淵が本著作を知っていたなら、『梵漢字法華陀羅尼』への影響を想定することができるだろう。

5) 終わりに

慈雲は『普賢行願讃』を通して、普賢菩薩への篤い信を失わなかったと思われる。この法華陀羅尼も、末尾は普賢菩薩陀羅尼で結ばれている。『理趣経』はもとより金剛薩埵讃でもあり、金剛薩埵は普賢菩薩と同一視される。これらの事実は、この著作が慈雲の真筆であることを側面から支持する事柄であろう。

7. 「梵学津梁」の再構築に向けて

さて、本展示では上述の『法華陀羅尼略解』、および本稿第3節においてやや詳しく解説した書目3）とならんで、2）チ590—10『梵学津梁略詮阿部伊部』略詮第五之一『略詮阿字部』の巻三も慈雲の直筆として展示する。今回の『法華陀羅尼略偈』自筆本発見とはすこしく意義が異なるが、『梵学津梁』がひとまずデジタル化で一段落したとは言うものの、筑波大学に「梵学津梁」関係の

手写本がこれほど多く所蔵されていることの意義はいささかも失われることはない。今回「阿部」のみではあるが、慈雲の真筆による写本を提示しうるのは、今後の『梵学津梁』研究にとって少なからぬ意義を有するものと推測される。

なお、一部の悉曇学者からは「『梵学津梁』とは、慈雲のペーパー・プランに過ぎず、現実には存在しなかったのだ」という見解が出されることがある。確かに「梵学津梁」に関しては、現存する数種の「目録」を見ても、所収書目のナンバリングがその都度変更され、また「全一千巻」と呼びならわすのが慣例になっているとは言え、全部を合算しても1000にはならないというのが実情である。しかしながら、この「梵学津梁」のプロジェクトが、慈雲自身の指揮の下に、多数の弟子たちを擁して数年間以上にわたって勧められたものであったことは間違いがなく、それを無下に「ペーパー・プラン」と言い放つのは正鵠を射ているとは言えまい。

またこの「梵学津梁」という試みは、わが国の近代まで一般的な形式であった「類書」の形式に則って編纂されたものであるということが銘記されねばならない。「類書」のうち著名なものとしては塙保己一（1746—1821）による『群書類従』がある。すなわち「類書」とは、自著であるかどうかをまず問うことはせずに、それまでに著述せられた諸書を、一定のテーマの下に筆写し収集するという体裁をとる。ちなみに塙と慈雲がほぼ同時代人であるということは銘記せられてよいだろう。

本稿では、ひとまず高貴寺 DVD の存在を前提とせずに、『慈雲尊者全集』収録の諸総目録から得られていたデータをもとに『梵学津梁』全体の性格等について考察することにする。

1. 総目録と七詮の別について

慈雲尊者による最大の事績『梵学津梁』は、「一千巻に及んだ」と一般に伝えられるが、その内実は伝承により一定していない。『慈雲尊者全集』には

1. 目録 383—390頁
2. 総目（＝内容：大正新脩大藏経 no. 2711）391—408頁 DVD 401, 404
3. 総目（最も詳細）409—463頁
4. 総目録（＝内容：大正新脩大藏経 no. 2711）464—477頁 DVD 402, 405；
406も同系統
5. 総目 478—482頁
6. 草本目録 483—491頁 DVD 403

という6種類の「目録」が掲載されているが、そのうち「一千巻」の内容を提示しているのは「3. 総目」の冒頭と末尾に掲載された2種類の細目である。

まず、3①409頁によれば、

本詮 1-197
 末詮 198-236
 通詮 237-344
 別詮 345-394
 略詮 395-?
 廣詮 579-918
 雑詮

とナンバリングが振られている。一方、3②462頁によれば、

本詮 1-250
 末詮 251-350 34/97
 通詮 351-450 19/85
 別詮 451-535 29
 略詮 536-568 114
 廣詮 569-918 16門
 雑詮 919-1000 29

となっている。一見して気づくのは、廣詮部の末尾が918で一致していることである。また②からは、最終的に略詮部がそれほどの分量にならないことが判るが、①では略詮部の末尾が記されておらず、この段階では内容が未決定であったことがわかる。

一方4によれば、

本詮 (巻数の記載なし)
 通詮 398-483
 別詮 398-463
 略詮 463-588
 廣詮 580-615
 雑詮 610-660

とあり、通詮・別詮、あるいは略詮・廣詮・雑詮の数の混乱が甚だしく、かつ総数が1000に到達していない。

以上から、「梵学津梁」全1000巻と呼ばれるものの総体としては、3②に基づきつつ、各書目それぞれに記された部立ての指示に従って所属を定める、と

いう方法を採用することが望ましいと思われる。また、各詮に分類される書目について、新刊の高貴寺DVDとの対照のもとに、より精密な『梵学津梁』の目録・分類と写本のカタログを作成する事業は、おそらく日本全国の図書館が協力して実行すべきことであり、またそれだけの価値を秘めた大事業となるだろう。これについて筆者が試みることは他日を期すことにしたい。

8. 終わりに

以上本稿で検証したように、ようやく公刊された高貴寺所蔵分DVDであるが、諦了の目録(1930年)がやや従来の目録から逸脱する傾向にあることなどが原因となって、高貴寺現所蔵分は約500点とはいふものの、それは副本をも含めた数でもあり、「一千巻」と謳われた「梵学津梁」の全貌を示すにはやや物足りないといわざるを得ない(もっとも、これは諦了はじめ高貴寺関係者の責ではなく、現実の厳しさに他ならないだけであろう)。これまでわれわれの想像するイメージは、『大正大蔵経』に掲載された「梵学津梁総目録」であり、あるいは『慈雲尊者全集』に収められた数種の目録であった。DVD版が公にされたからとて、これらのイメージを一概に消去する必要もなからうし、現実には高貴寺からかなりの分量の梵書が流出しているとすれば、元来の「梵学津梁」の実態を復す試みは継続されてしかるべきなのであろう。

今回の『法華陀羅尼略解』も、諦了師はじめ、弟子たちの手で、おそらくは「梵学津梁」に追補されて当然だったのであろう。その存在は、伎人戒心和上がおそらく知っていた。だが阿弥陀寺の廃寺、その後となった長谷宝秀師による『慈雲尊者全集』の編纂、などから現在まで筑波大に所蔵されるに至ったものであろう。本文中にも記したように、「梵学津梁」再構成の試みは、日本全国の大学・寺院その他の総合的協力の下に、これからこそ本格に始動すべき事柄といえるだろう。今秋本学での展示会が、その胎動となることを願ってやまない。